これがオススメ！ 読み聞かせ本

中・高学年向き

学習指導要領で読み聞かせがすすめられて、読み聞かせについてのたくさんの本が出版されています。また、ブックリストもたくさん出ていますが、さて実際に子どもたちに読もうと思うと、どの本がいいのか、どうやって読んであげたらいいのか、困ってしまいます。「これなら楽しく読み聞かせができるよ」という本と読み方を紹介しましょう。

「新美南吉」といえば「ごんぎつね」！　4年の国語の教科書に載っていて、ほとんどの子どもが知っている物語です。南吉は早くに母を亡くしたせいか、母との心の結びつきを繊細に表現した作品が多いのではないでしょうか。

その中で今回のお薦めは『狐』です。物語の内容もさることながら、長野ヒデ子さんの絵に引き寄せられてこの本を手に取りました。

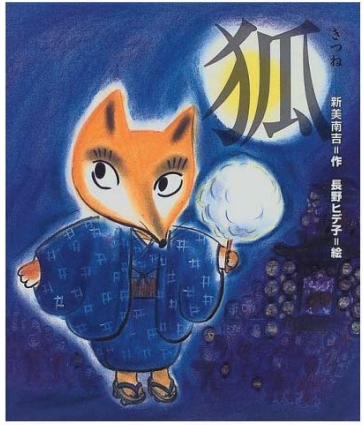
読み進めていくと、聞いている子どもの心も物語と同時に進行していくのがよくわかります。

現代とは少し違う幻想的な祭りの夜。やがて祭りが終わり、暗い夜道を帰っていく子どもの心の中に沸いてくる、一種のもの悲しさと不安。聞いている子どもも自分の心を覗いているようです。その不安をかき立てるものは、「下駄やさん」で聞いたあの言葉。

家に帰り着いた小さい文六ちゃんの不安を受け止める母親の受け答え。その口調がなんと愛情に満ちて書かれていることか。そして親子の情愛を、長野ヒデ子さんはなんと温かく描いていることか。

文と絵とのマッチは、読み語る教師とそれを聞く子どもたちを大きな情愛ですっぽり包んでくれました。物語が終わった後は、しばし教室は静まりかえっていました。

南吉の魅力をさらに引き出した絵本だと思います。



狐
新美南吉／作・長野ヒデ子／絵
（偕成社）

文｜木村育子（江戸川区立本一色小学校）　写真｜偕成社